茨城大学教育学部紀要（教育総合）増刊号（2014）1 － 10

井上ひさし「握手」の言語表現

川嶋秀之 *

（2014 年 8 月 8 日 受理）

Essay on Expression of「AKUSHU（HANDSHAKE）」by Hisashi Inoue

Hideyuki KAWASHIMA *

（Received August 8 , 2014）

はじめに

井上ひさしの短編「握手」は平成２４年版の中学３年の教科書に載っている[1)]。最初に教科書に掲載されたのは平成５年度版からであるから，平成２６年現在でもう二十年以上載り続けていることになる。それはこの作品が魅力に満ちているからであろう。

織田保夫は

『握手』はわかりやすくて感動的な作品である。

とその論を書き起こし[2)]，青嶋康文も

井上ひさし『握手』を読み終えた時に残る感動は，よい芝居を見終えた時に近いものがある。

と，その論を書き始めている[3)]。二人とも論文の書き起こしに「感動」という語を使っているのは，深い感銘を受けたことを語っているとみてよい。その感銘は，この作品に描かれたルロイ修道士という人間の考えや生き方，そしてその病いと死によるところが多いであろう。光村図書の『学習指導書』（以下，『指導書』と略す）では次のように述べている[4)]。

「握手」は，子供たちのために献身的な生涯を送り，人を愛し，人のために尽くすことを自らの喜びとしたルロイ修道士のエピソードを通して，生きることと死ぬこと，また，人と人とのつながりの温かさをしみじみと感じさせてくれる作品である。

このような立派な人物を描いたこの作品は，一方それだけに道徳的に読まれかねない面も含んでいる。松本修は

ちょっといい話としてルロイ修道士のやさしさを読みとり，道徳的なこころの教育に短絡させられてしまうことをおそれる。

との懸念を表明している[5)]。戦時中のルロイ修道士のエピソードなどは人間として極めて立派な行動であるし，ルロイ修道士が「わたし」に語る言葉には教訓的な意味が含まれているのが多い。

*茨城大学教育学部国語教育教室（〒 310-8512　水戸市文京 2-1-1；Laboratory of Japanese Language Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

ルロイ修道士の生き方にみられる献身・誠実など，この作品には授業で道徳的に扱える要素が多く含まれているといえるだろう。

しかし，道徳的に扱うことはこの作品と無関係な教訓へとずれてゆくことであり，この作品の湛える魅力やそれによってもたらされる感動から離れてゆくばかりであろう。本稿では，「握手」に用いられた言語表現の特質あるいは相互の前後照応等に基づき，ルロイ修道士の描述のあり方を探り，かつこの作品に底流する物語の論理を読み解いていきたい。

一　「握手」における問題

この作品を解き明かすには，この作品の言語表現のあり方，またそれによって提示される事柄にいくつかの問題点や検討内容を設定しなければならない。以下にそれを列挙しよう。括弧内は光村図書版教科書（平成２４年度）のページ数と行数を示す。

1．「上野公園に古くからある西洋料理店へ, ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。」(p18-1)
　〇ルロイ修道士とかつての教え子である「わたし」は上野にある料理屋で再会するが，「上野」という土地であるのはなぜか。

2．「……彼の握力は万力（まんりき）よりも強く，しかも腕を勢いよく上下させるものだから，こっちの肘（ひじ）が机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって，腕がしびれた。」(p19-20~p20-2)
　〇ルロイ修道士と「わたし」の出会いの握手，肘が聖人伝にぶつかったことの意味。

3．「さよならを言うために，こうして皆さんに会って回っているんですよ。」(p18-9)
　「それから，このケベック郊外の農場の五男坊は，東京で会った，かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。」(p20-4)
　〇ルロイ修道士の行動・様子を表す以上のような表現から何がわかるか。

4．「日本にやって来て二年もしないうちに戦争が始まり，……みんながそう思い始めたからである。」(p20-17~p21-14)
　〇ルロイ修道士の戦争中のエピソードどのような意味を持つか。
　〇ルロイ修道士の行動のあり方。
　〇「うわさ」としてこのエピソードを描いたことの意味。

5．「総理大臣のようなことを言ってはいけませんよ……一人一人の人間がいる，それだけのことですから。」(p22-1~5)
　〇「ルロイ修道士の教え　その一」とする。この言葉の担う意味。

6．「仕事がうまくいかないときは，この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。……ルロイのこの言葉を忘れないでください。」(p24-13~15)
　〇「ルロイ修道士の教え　その二」とする。この言葉の担う意味。

7．「日本でお暮らしになっていて，楽しかったことがあったとすれば，それはどんなことでしたか。」(p25-1~2)
　「それはもう，こうやっているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て，一人前の働きをしているのを見るときがいっとう楽しい。……」(p25-5~6)
　〇ルロイ修道士の答えの意味するもの。

８．「ルロイ先生，死ぬのは怖くありませんか。……」（p26-11）
「天国へ行くのですから，そう怖くはありませんよ。（p26-14）
〇「わたし」が質問したときのルロイ修道士の答え方。
９．「わかりましたと答える代わりに，わたしは右の親指を立て，それからルロイ修道士の手をとって，しっかりと握った。それでも足りずに，腕を上下に激しく振った。
「痛いですよ。」
ルロイ修道士は顔をしかめてみせた（p26-19~p28-2）
〇別れの握手の場面のありかた。

以上のような問題点を設定してみた。これをまとまりごとに括れば，次のようになるだろう。

・ルロイ修道士の東京への旅，再会場所が上野であること「１」「３」
・ルロイ修道士の教えと人間性「５」「６」「７」
・カトリック教徒としてのルロイ修道士「４」「８」
・出会いと別れの握手の意味「２」「９」

勿論，これらは相互に関連してさらに新たな意味を示すことになるが，以下のそれぞれの検討によって明らかになるだろう。

二　ルロイ修道士の旅，上野という場所

ルロイ修道士はなぜ東京へ出て来たのか。先に挙げた「３」の本文の一行前に「今度故郷（くに）へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。」（p18-8~9）とあることから明らかなように，故郷へ帰る前に「皆さん」に別れの挨拶をいうためである。「皆さん」とはルロイ修道士が園長を務めたことがある児童養護施設「光が丘天使園」の教え子たちである。後でわかるように「故郷（くに）へ帰る」というのは方便で，実際は病気のため余命幾ばくもなかったのだが，そうした自身の身体状況の中で選択した最後の行為が教え子に会うことだった。これは後で検討することも関わるが，教え子一人一人に会うこと最後の願いだったということは重い意味を持つ。

この作品の舞台は，なぜ上野だったのか。織田がこの問題に言及している。

> 言うまでもなく上野は東北への玄関口，料理店は築地精養軒の支店として明治九年に開業した上野精養軒であろう。つまり，ルロイ修道士と「わたし」の会合は，東北と東京の接点，また西洋と日本との接点で行われたというわけだ[6]。

上野が東北地方への玄関口であるというのは重要な指摘である。この点をもとにこの作品に即して読めば以下のようになろう。上野であるのは，ルロイ修道士がここでの待ち合わせを最後に上野を発つからである。「光が丘天使園」は「仙台」（p23-10）にあったと考えられるから，「上野駅の中央改札口の前」で「わたし」と握手をして別れたルロイ修道士は汽車で仙台へと向かったであろう。つまり，「わたし」はルロイ修道士が東京で会った最後の教え子だったことになる。東京で他の教え子には会えたが，多忙のゆえか「わたし」には上野を発つ直前ぎりぎりまで会えなかった。ようやく帰りの電車の出発間際に会えることになったのである。そうすると，ルロイ修道士の教え子を訪ねて回る旅は，上野で「わたし」に会うことで完成したということになる。「わ

たし」に会うのを意図的に最後に回したという理解も成り立つが，それでも「わたし」に会うことで旅が完成するということには変わりがない。

ルロイ修道士は東京で教え子の殆どすべてに会うことが出来たのであろう。それは「それから，このケベック郊外の農場の五男坊は，東京で会った，かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。」（p20-4）とあることからわかる。ルロイ修道士は再会した教え子の様子を話したくてしかたがないのである。このことは，ルロイ修道士の生涯最後の旅の目的が十分満足できるくらいに達成できたことを示している。その最後が「わたし」であり，東京で生前のルロイ修道士の会った最後の人間となった。それにしても，再会していきなり教え子たちの近況を語るルロイ修道士の姿は異様である。通常の「ルロイ修道士」という呼称ではなく，「ケベック郊外の農場の五男坊」と突き放したようにあるいは遠い無縁な者のように表現したのは，「わたし」の呆気にとられやや距離を置いた姿を語っている。再会してすぐのことで，戸惑ったことであろう。しかし，この夢中になって教え子のことを語るロイ修道士の姿に，次章で扱うルロイ修道士の人間性がうかがえるのである。

なお，「古くからある西洋料理店」というのは，著名な老舗で，ルロイ修道士も「わたし」も場所を知っていて上野駅に近いことから，待ち合わせ場所として選ばれたのであろう。

三　ルロイ修道士の教えと人間性

「握手」には，ルロイ修道士が「わたし」を教え諭す場面がある。ルロイ修道士の左の指先は不思議な格好をしている。指先はつぶれ鼻くそを丸めたようなものがこびりついている。これには，戦争中日本人が見せしめのために木づちでたたきつぶしたとのうわさがあった。再会してルロイ修道士の指を見た「わたし」はそうしたうわさを思い出し，

> 「日本人は先生に対して，ずいぶんひどいことをしましたね。……木づちでたたき潰すに至っては，もうなんて言っていいか。申し訳ありません。」（p21-15~17）

と謝罪する。それに対してルロイ修道士が言ったのが次の言葉である。

> 「総理大臣のようなことを言ってはいけませんよ。だいたい，日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢です。それに，日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる，それだけのことですから。」（p22-1~5）

これを「ルロイ修道士の教え　その一」とする。

もう一つは，ルロイ修道士が「仕事はうまくいっていますか。」（p-24-9）と尋ね，「わたし」が「まあまあといったところです。」（p-24-10）と答えた後にルロイ修道士が言った言葉である。

> 「仕事がうまくいかないときは，この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。問題を細かく割って，一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」（p24-13~15）

こちらを「ルロイ修道士の教え　その二」とする。これら二つの教えが，この作品の中で担っている意味を考えよう。論の展開上，「ルロイ修道士の教え　その二」の方から検討する。

青嶋はこれについて

このことばは「わたし」に会う前から，どうしても伝えたいと考えていたことばだろう。

と述べている[7)]。確かに「遺言」(p24-16) のように伝えようとしていた言葉には違いない。だが，それは『指導書』に

「わたし」が「まあまあといったところです。」と答え，ルロイ修道士もそれを喜んでいるにも関わらず，「仕事がうまくいかないときは，……」と言ったことから，あらかじめ言葉を用意していたことがわかる。

とあるように[8)]，あらかじめ用意していた言葉であったとみることもできる。そうすれば，この言葉は東京で会った教え子の誰にも言った言葉ということになる。誰にも伝えようとした言葉は，勿論大事な内容を持つ言葉であるが，反面誰にも妥当する一般的な言葉でもある。一人一人に言い分けて伝える言葉ではない。「ルロイ修道士の教え　その二」で語られた言葉は天使園を巣立った子供たちにとって大事な言葉ではあるが，いうならば処世訓に過ぎない。

一方「ルロイ修道士の教え　その一」はどうか。これは，「わたし」がルロイ修道士の指を見て不意にあるいは不用意に言った言葉に反応して答えたものである。『指導書』では

……この再会のためにあらかじめ用意されていたもの（P24L13「困難は分割せよ」）とは異なり，状況の中で自然に出てきたものであり，……。

と述べている[9)]。的確な見解だと思う。つまり，これはルロイ修道士があらかじめ用意していなかった言葉だということで「ルロイ修道士の教え　その二」と対照的であり，「わたし」以外の教え子の誰にも言わなかった言葉であると考えられる。いわば偶然ハプニングによって出て来た言葉である。物語の展開上はハプニング的に唐突に出て来た言葉であるが，その内容は「一人一人の人間がいる」というルロイ修道士の信条を吐露するものとなっている。この言葉はこの作品にとってもっとも重みを持つ言葉である。ルロイ修道士の行動原理がこのことであり，その人間性の基点もここにあるとみることができるからである。

かつてルロイ修道士は「園長でありながら，ルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けて」(p20-9)，子供たち一人一人の食料を作ることに励んでいた。今度のルロイ修道士の旅はそうして育てた教え子一人一人と会うためであった。そして，「二」でみたように再会した「わたし」にいきなり教え子たちの近況を語るのである。ルロイ修道士の語り口は，上川君についての話（p25-12）に見られるように個人に即して日常の些事を生き生きと語るものである。おそらく，再開したばかりの「わたし」にもそのようにして教え子たちのことを語ったのであろう。「わたし」のことを尋ねる前に教え子たちのことを話したくてたまらないのである。ここには，一人一人を大切にするルロイ修道士の人間性がみてとれる。

「わたし」の「日本でお暮らしになっていて，楽しかったことがあったとすれば，それはどんなことでしたか。」(p25-1）という質問にも，「それはもう，こうやっているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て，一人前の働きをしているのを見るときがいっとう楽しい。……」(p25-5~6）と答えている。「こうやっているとき」とは，つまりあなたのような教え子人一人と会うのが一番楽しいということである。そして，「そうそう，あなたは上川君を知っていますね。上川一雄君ですよ。」と，ここでも話題は一人の教え子のことに移る。徹底して一人一人を大切に見続け関わって来た人であったことがわかる。

なお，ルロイ修道士の旅の目的は教え子一人一人に会うことだとしてきた。勿論教え子の近況を知りたいということも大事だっただろうが，この旅にはもう一つの目的があった。その目的と

は「それよりも，わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか，もし，していたなら，誤りたい。」（p22-18~20）とあることから判明する。話を本来の方向へ戻す「それよりも」という言葉で切り出したこの言明により，過去の行為の謝罪をするのが今度の旅の本当の目的だったことがわかるのである。ルロイ修道士の人生最後の旅はかつて人々に対しはからずも行なってしまった罪を償う旅であった。そして，これも一人一人の人間に会って許しを乞うたのである。

以上，この章ではルロイ修道士の二つの教えの性質の違いと人間性についてみてきた。「ルロイ修道士の教え　その一」は信条であり，「ルロイ修道士の教え　その二」は処世訓である。この作品でこの二つは対照的な意味を持つ。この作品に一貫して底流しているのは「ルロイ修道士の教え　その一」の「一人一人の人間がいる」ということであり，ルロイ修道士はその信条に従って最後まで生きたということになる。

四　カトリック教徒としてのルロイ修道士

ここでは，ルロイ修道士の戦争中のエピソードと，「わたし」の「ルロイ先生，死ぬのは怖くありませんか」という質問に答えるルロイ修道士の言葉が何を意味するかについて検討する。
最初に後者の問題から検討する。「わたし」とルロイ修道士の会話は以下のように展開する。
上野駅の中央改札口の前で，思い切ってきいた。

「ルロイ先生，死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたありませんが。」

かつて，わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように，ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

「天国へ行くのですから，そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば，何もないただむやみに寂しいところへ行くと思うよりも，にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために，この何十年間，神様を信じてきたのです。」（p26-10~18）

この会話の始めにある「思い切ってきいた。」というのはどういうことであろうか。ルロイ修道士は病気なのではないかと，「わたし」はずっと懸念を抱いてきたが，「重い病気にかかっているのでしょう」と聞くことは「さすがにそれははばかられ，」（p25-3~4）質問を控えてきた。ようやく別れ間際の上野駅に来て思い切ってきいたということであろう。しかし，そうならば「ルロイ先生はご病気なのですか」と聞きそうなものである。「死ぬのは怖くありませんか。」と聞いたのは，直接病気のことは聞けずやはりはばかられる気持ちがあったのであろう，死の方へずらして聞いてしまった。だが，この転喩的ずらしはルロイ修道士には理解されなかった。突然，「死ぬ」こととその怖さについて尋ねられたルロイ修道士は赤くなって狼狽する。死とその恐怖そしてその克服の問題は，宗教として根本的な問題に属する。そしてこのことに対してカトリック教徒ならば確信を持って答えることができるはずである。ところが，ルロイ修道士は「天国へ行くのですから，そう怖くはありませんよ。」と答えるのである。「そう怖くはありません」という言葉にはカトリック教徒としての強固な信仰心が殆どみられない[10]。修道士なら死と恐怖の問題につい

てはもっと確信を持って答えるべきであろう。「わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように,」「少し赤くなって頭をかい」たのは，知られたくないこと，隠しておきたいことを聞かれて照れて頭をかいたのではないか。知られたくないこと，隠しておきたいことというのは，ルロイ修道士の信仰をめぐる自分の信念ではないか。ルロイ修道士は余り熱心に信仰していず，信仰の核心の神や死に関わる問題には不案内なのである。このことに関してずっと聞かれるのを避けてきたのではないか。その後に続く「あると信じるほうが楽しいでしょうが。……にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために，この何十年間，神様を信じてきたのです。」という言葉からわかるのは，ルロイ修道士はカトリック教徒としての強固な信仰心を持たず，天国へ行けるだろうというぐらいの功利性のレベルによって神を信じていたということである。

織田は上記のルロイ修道士の言葉について

> ルロイ修道士は天国の実在を明言していない。そして，神を信じてきたのは自分のためだったと言うのである。これは何とも〈現実的〉な発言ではないか。

とし，さらに

> 自らの信仰の生涯を語りながらもこの聖職者はすべての根源を神においていないからである。

と述べている[11]。「信仰の生涯」を語っているとまではいえないが，後半の「この聖職者はすべての根源を神においていない」というのは正鵠を射ていよう。

ルロイ修道士は所属する教団の信仰対象である神を余り熱心に信仰していなかった。教団に長年所属し院長も務め，カナダの本部にも戻れるのであるから，表向きは修道士として信仰者として生きてきたのには違いない。しかし，この作品を通して，戦時中のエピソード以外に，神や信仰への確たる思いを語るところは一つもない。ルロイ修道士は神への信仰より，人間一人一人に向き合うことを優先させて生きたのではないか。

ここで，戦争中のエピソードを見てみよう。このエピソードはルロイ修道士の指の格好の由来をうわさとして語るものである。以下に要約する。

> ルロイ修道士たちは戦争中丹沢の山中で働かされた。カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられていたので，ルロイ修道士が代表となって日本人監督官に休ませてほしいと申し入れた。しかし，要求は通らず，見せしめのために左の人差し指の先を木づちでたたかれあのような格好になった。

ここでは二つの問題を考えよう。一つはルロイ修道士の行動であり，もう一つはこれをうわさとして描いた意味である。

ルロイ修道士の行動は戒律を守るための立派な行動である。カトリック教徒として信者を代表して監督官と交渉した勇敢な行為である。ここには確固たる信仰を抱き，その戒律に基づいて行動していたかつてのルロイ修道士の姿が描かれている。その勇敢な行動の結果，指をたたかれ指先が潰れる後遺症が残った。これは受難といえる。受難は宗教上大きな意味を持つ。ここにみられる信仰に基づく勇敢な行動とその受難のエピソードは，ルロイ修道士が聖人伝に載せられてしかるべき価値のある人物であることを語っている。

ここで，「……彼の握力は万力よりも強く，しかも腕を勢いよく上下させるものだから，こっちの肘が机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって，腕がしびれた。」（p19-20~p20-2）とある最初の握手の所になぜ「聖人伝」が登場するのか理由が見えてくる。聖人伝は大切な本として書架

にしまったり，あるいは手近な所に置くにしても大事に取り扱うものであろう。ルロイ修道士は聖人伝を相手と握手したときに肘がぶつかるような所に置き，ぶつかっても一向に気にしない。一応体裁のために机に置いておいたのだろうが，「デスクワークを避けてい」（p20-10）たのだから読むことは殆どなかったであろう。ルロイ修道士は聖人伝にあまり価値を置いていないのである。本の中にいる聖人とは無縁となっている。このことはまた，ルロイ修道士の自身のかつての聖人性を否定していることを表しているだろう。ルロイ修道士は信仰を第一として生きることをやめたのである。カトリックの戒律を機械的に守ること，またそのような機械的集団の代表となること，そういうことから脱却し一人一人の人間を大切にする人間へと変わったのである。

では，このことを「うわさ」として描いたのはいかなる理由によるのだろうか。「うわさ」であるから，真偽のほどがわからないという形で提示している。「日本人は先生に対して，ずいぶんひどいことをしましたね。……木づちでたたき潰すに至っては，もうなんて言っていいか。申し訳ありません。」（p21-15~17）と言う「わたし」の謝罪について，ルロイ修道士はその内容については否定せず，「わたし」の発言の形式について注意を与えるだけである。このことからエピソードは真であると推定されるが，なぜ確定的事件としてではなく「うわさ」として曖昧な形で提示したのだろうか。まだよく解釈できないのだが，一応の考えを述べておこう。このエピソードを確定的なものとして描くと，ルロイ修道士は聖人伝の中の人物そのものとなってしまうからである。それは，その後のルロイ修道士の姿を消しかねない強さがある。戦時中のエピソードと現在のルロイ修道士を直に結び付けて，この聖人が一人一人の人間を大切にすると言うように誤解を招く読みを誘うおそれがある。それを避けたのではないか，と考えたい。

さて，以上の検討から，カトリック教徒として熱心な以前のルロイ修道士像と信仰心の弱いその後のルロイ修道士の姿が浮かび上がってきた。信仰だけを見てそれに基準を置けば，好ましくないことのように見える。しかし，ルロイ修道士のこの変化には理由があった。おそらく「光が丘天使園」で働くようになってから，今目の前にいる恵まれない子供一人一人を育てることに力を尽くすようになった。そして，一人一人の子供たちと触れあっているうちに，相対的に信仰は遠のいた。かつて聖人伝に列せらるべき信仰心を持って生きたルロイ修道士は，ここにおいて自らを捧げる対象を神から一人一人の人間へと変えたのである。ここにこの物語の感動の本質がある。多くの人がこの物語を読んで感銘を受けるのは，人間を神より優先するこのようなルロイ修道士の生き方に共感を抱くからではないだろうか。

それまで強い信仰心を持っていたと思われたルロイ修道士の余り熱心でない信仰心をさらけ出させたのは，「わたし」の死に関する唐突な質問であった。この作品では，再会した「わたし」の最初の謝罪が唐突に行われ，それに答えたルロイ修道士は自分の信条を表明してしまう。また，別れの時に「わたし」が唐突に発した質問により，ルロイ修道士は不熱心な信仰ぶりを告白してしまう。このように，この作品ではハプニング的に出た「わたし」の謝罪や質問が，ルロイ修道士の信条と信仰ぶりを引き出し，それが最初と最後に置かれることで枠を与えている構造になっていることを，最後に指摘しておく。

五　出会いと別れの握手の意味

この作品には「出会いの握手」「再会の握手」「別れの握手」の三つの握手がある[12)]。このうち「再会の握手」は「わたし」に疑念を生じさせ，ルロイ修道士の体調を推測しながら物語を展開させる機能を発揮する。これについては問題がないだろう。ここでは,「出会いの握手」と「別れの握手」について取り上げよう。

「出会いの握手」は

寝るところと食べることに不自由がないことを知らせ，大いに歓迎することを，この握手によって示しているのである。

というように意味が取れるであろう[13)]。

「別れの握手」も万感のこもったものであろうし，

……作品全体の中でもっとも感動的な場面である。……今も変わらぬ敬愛の思いと，相手が病気であることを否定したい「わたし」の願いが，知らず知らずのうちに手に力を込めさせたのであろう。……[14)]

のように意味づけることもできるであろう。

「出会いの握手」と「別れの握手」とを対比してみれば，握る側が「ルロイ修道士」→「わたし」，握られる側が「わたし」→「ルロイ修道士」，というように反転し，力の大小もそれに応じてまた反転している事も容易に見て取れる。かつてのルロイ修道士と「わたし」は対照的な関係に置かれることとなったし，握手に思いを込めるというのもわかるのだが，一つ疑問が生じるところがある。それは，この場面の最後のところで

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた（p28-1~2）

とあるところである。「痛いですよ。」と言ったルロイ修道士は「わたし」の思いを理解しただろうか。できていないはずである。一方が思いを込めて強く握りしめるため，他方はそこに込められた思いを，その痛みと思いの過剰性ゆえに理解できない。つまり，握手は互いに理解できないことを示している。「出会いの握手」を振り返ってみれば，ここでも「わたし」はルロイ修道士の大きな手による強い握手を受け止め切れていないことがわかる。なぜなら，再会したとき「ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめた」（p18-11）とあるからである。握手には痛みの否定的な思い出しか残っていないからである。

握手には一方には強い思いがこもるが，それは相手には伝わらない。「出会いの握手」には生活上の安心のこと以上に，ルロイ修道士の信条やがたやすく言語化できない思いが込められていたであろう。しかし,「わたし」はずっとそのことが理解できなかった。ルロイ修道士の全人間性というものを知ったのは再会したからである。時を経て再会し言葉を交わして，彼の信条とその裏打ちのような宗教観とをようやく理解することができた。「わかりましたと答える代わりに，わたしは右の親指を立て,」（p26-19）をそのように解しておこう。「わたし」は今やっとルロイ修道士の強い握手の意味を知ったのである。

そして,「わたし」も思いを込めて「別れの握手」をしたが，上に述べたようにルロイ修道士には伝わらなかった。このことは，この作品の最後の「わたしは知らぬ間に，両手の人さし指を交差させ，せわしく打ち付けていた。」という所に関係する。この指言葉に込められた意味は次のようなものであろうか。

ルロイ先生，最初の出会いの時あなたがあんなにも強く手を握ったことの意味がわかりました。でも，最後の上野駅での別れの時わたしが強く握った意味は，「痛いですよ。」と顔をしかめたのですから，わたしの思いは届かなかったのでしょう。わたしもルロイ先生の握手の意味を理解するためには時間が掛かりました。先生はあの後すぐに亡くなられたので，わたしが握手に込めた思いを知ってもらう機会が永遠に失われました。残念でなりません。

注

1）光村図書『国語３』と学校図書『中学校３』に収められている。本稿の本文は光村図書版によった。なお，「握手」の初出は『IN・POCKET』（1984.5），後に単行本『ナイン』（講談社 1987）に収められ，同書は文庫本としても刊行された（講談社文庫　1990）。

2）織田保夫「『握手』の構造」（田中実・須貝千里編『文学の力 × 教材の力　中学校編３年』 教育出版　2001　p.97.）

3）青嶋康文「喪失と伝承―井上ひさし『握手』を読む」（田中実・須貝千里編『文学の力 × 教材の力　中学校編３年』 教育出版　2001　p.111.）

4）『平成２４年度版 中学校 国語 学習指導書』（光村図書　2012　p.38.）

5）松本修「『握手』小論―精神の伝承の物語」（『Groupe Bricolage 紀要』No.16　1998　p.66.）

6）注２書　p.99.

7）注３書　p.119.

8）注４書　p.47.

9）注４書　p.45.

10）このところの不自然さを最初に指摘したのは佐藤洋一である。佐藤は「死への恐怖を「そう怖くはありませんよ」（傍線は佐藤）と語りはじめる場面は，神に使（ママ）える聖職者の答えとしては不自然。」と述べる。　佐藤洋一「物語・小説の言語技術教育論―井上ひさし『握手』を中心に―」（『愛知教育大学研究報告』44（教育科学編）1995　p.17.）

11）注２書　pp.104~5.

12）握手の呼称は青嶋による。注３書　p.116.

13）菅原利晃「井上ひさし『握手』の授業―表現の比較を通して読解を深めさせる授業の試み―（『札幌国語研究』 第 11 号　2006　p.6.）

14）注４書　p.49.